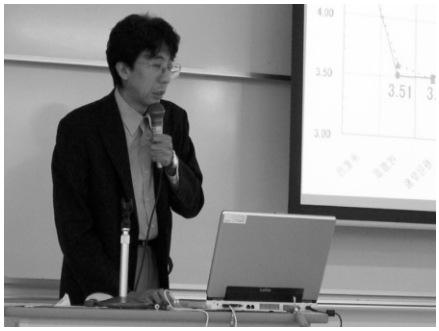
2006年度前期 授業評価（SE, TE）の概要報告

「都市教養プログラム」

都市教養学部人文・社会系・助教授
金子　善彦



2006年度7月、都市教養プログラム科目を履修する学生及び授業担当者を対象に、授業評価が実施された。以下は、その結果の概要報告である。なお、以下の報告は、同年10月5日に開催された本学FDセミナー（通算第3回）で報告者が行った口頭発表に基づくものである。

1. 授業評価実施の基礎データ

まず、今回の授業評価の規模を表わす基礎データを示した上で、具体的な調査法について述べておくことにしよう。

SE（学生）

対象：2006年度前期 都市教養プログラム科目
（全70科目）受講者
実施時期：　2006年7月
全履修者数：　9375名
ﾏｰｸｼｰﾄ回答件数：4852件（回収率51.8％）
自由記述件数：　1293件

TE（教員）

対象：本年度前期 都市教養プログラム科目
（全70科目）担当教員
実施時期：　2006年7月
全担当者数：　93名
ﾏｰｸｼｰﾄ回答件数：74件（回収率79.6％）
自由記述件数：　79件

調査は、15項目にわたる質問に5段階評価で回答するマークシート形式のものと自由記述との両面から行われ、学生と担当教員のそれぞれに回答を求めた。マークシート形式のアンケートに含まれる質問事項は、以下の通りである。

	学　生	教　員
問1	この授業への出席率は？	この授業の受講者人数は適切な規模であった。
問2	私は、この授業に意欲的・積極的に取り組んだ。	学生は、この授業に意欲的・積極的に取り組んだ。
問3	私は、この授業を適切に、客観的に評価する自信がある。	学生は、この授業に対し、十分な理解力を持っていた。
問4	この授業は、目的が明確で、体系的になされていた。	この授業については、目的を明確にして、体系的に行うことができた。
問5	教科書、レジュメ、黒板、OHP、PC、CD、ビデオ等の使用が授業の理解に役立った。	教科書、レジュメ、黒板、OHP、PC、CD、ビデオ等を適切に使用することができた。
問6	授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	授業の難易度は、全体的に適切であった。
問7	教員の話し方は聞き取りやすかった。	学生に聞き取りやすいように話すことができた。
問8	教員は、効果的に学生の授業参加（質問、意見等）を促していた。	効果的に学生の授業参加（質問、意見等）を促すことができた。
問9	教員は、学生の質問、意見等に対し、明快にわかりやすく対応していた。	学生の質問、意見等に対して、明快に、わかりやすく対応することができた。
問10	授業に対する教員の熱意が感じられた。	この授業に対し、熱意を持って取り組んだ。
問11	この授業の選択に当たってシラバスが役に立った。	この授業を学生が選択するに当たってシラバスが役に立つように作成した。
問12	この授業のテーマは自分の関心にあっていた。	この授業で学生がテーマに関心を持つように教えた。
問13	この授業を受講して自分の視野が広がった。	この授業で学生の視野が広がるように促した。

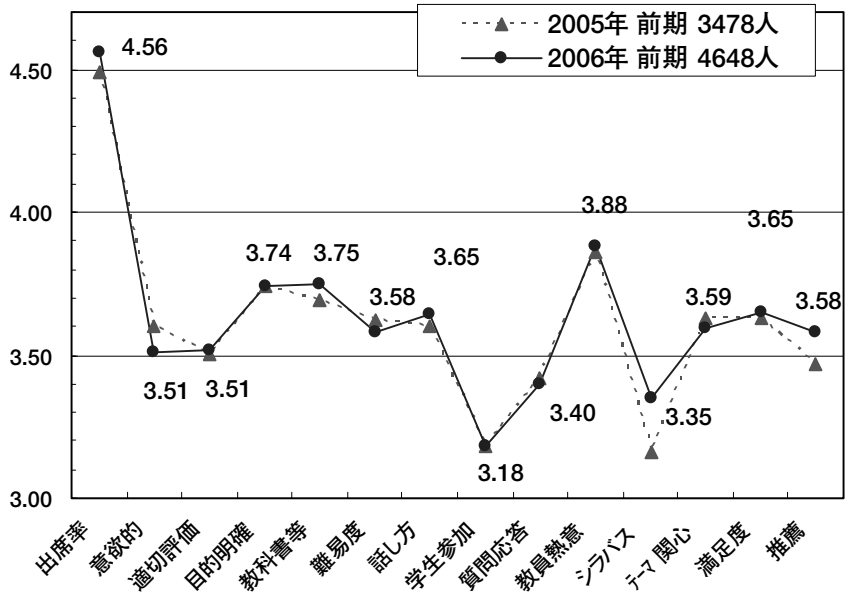
問14　私は、この授業を受講して満足した。　　学生は、この授業を受講して満足したと思う。
問15　私は、この授業をほかの学生に薦めたい。　　私は、この授業を教えて満足した。

ご覧の通り、SE, TEの各質問事項はおおむね対応しており、同じ事柄に関して学生と教員の受け止め方を比較できるよう工夫されている。回答者は、それぞれの質問につき、「強くそう思う（5)」「そう思う（4)」「どちらとも言えない(3)」「そう思わない（2)」「全くそう思わない（1)」から1つをマークし、評価する。

2. 概観

a. 全般的な傾向

調査結果（SE）の全体的な傾向を概観したものが、右の折れ線グラフである。



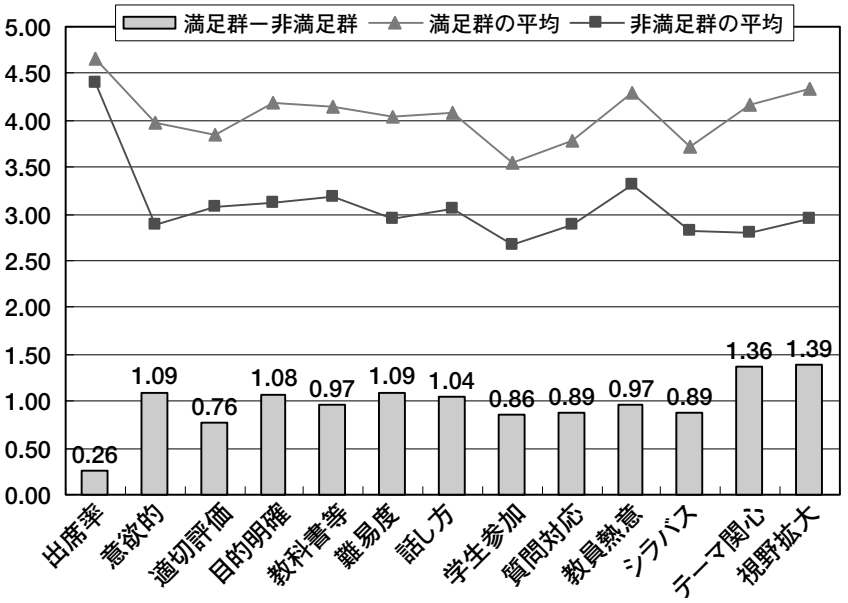
比較的評価が高いものから見ていくと、「出席率」（問1）を別にすれば、「教員の熱意」（問10）に関して突出した評価になっていることがわかる。総合的な「満足度」（問14）についても、それよりはやや落ちるものの、高い評価を得ており、これは他の科目群の場合と比較しても遜色ない。

他方、厳しい結果となったのは、「学生参加」（問8)、「シラバス」（問11)、「質問応答」（問9）で、特に学生の授業参加に関する評価は、著しく低い。これについては分析が急務であるため、報告の最後で詳しく触れる。また、シラバスについても、昨年度前期よりはアップしているものの、依然として低い数値に留まり、課題が残る。

b. 総合満足度への影響

次に、他のどのような要因が、総合的な「満足度」（問14）に影響を与えるのかを見ることにしよう。

右のグラフは、各質問事項に対する回答を満足群（5, 4）と非満足群（1, 2, 3）とに分け、それぞれの平均値を比較したもので、その差が大きいほど総合的な満足度への影響が大きいと推定される。満足群と非満足群の差が1ポイント以上のものを列挙すると、「視野拡大」（問13)、「テーマ関心」（問12）が最も大きく、ついで「難易度」（問6)、「学生意欲」（問2)、「目的明確」（問4)、そして「話し方」（問7）がそれに続いている。逆に、今回最も評価が低かった「学生参加」（問8）は、このグラフによる限り、総合的な満足度にはさほど影響は大きくないという結果となった（因

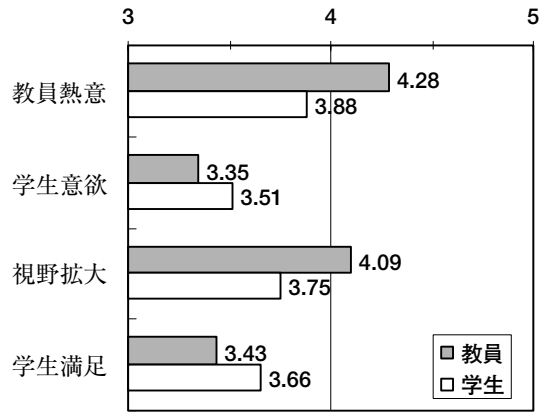


みに、情報科目の場合も、分析方法は異なるが、その点ほぼ同様の結果が出たことが報告されている)。これをどう見るかは難しい問題であるが、少なくとも、学生の授業参加が重要でないということにはならないだろう。

3. 学生・教員比較

次に、各質問事項について学生と教員のポイントを比較し、双方の間でどのような認識のずれがあるのか（あるいは、ないのか）について述べておこう。質問項目を①「動機・達成度」、②「目的テーマ等の設定」、③「コミュニケーション」のカテゴリーに分類し、順に検討する。

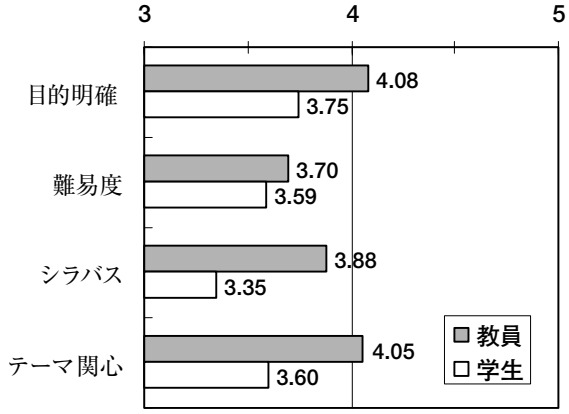
①「動機・達成度」



先ほど、「教員の熱意」（問10）に関して突出して高い評価を得ていると述べたが、教員に関してはさらにそれを上まわり、各教員が熱意をもって授業に取り組んでいることを窺わせる。しかし、そのことは反面で、教員側の熱意が、必ずしも学生に伝わっていないことの現われかもしれない。また、「視野拡大」（問13）についても、学生・教員の差は比較的小さいが、同様の傾向が見られる。

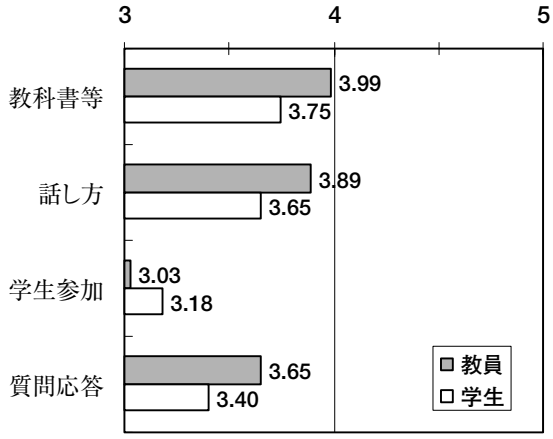
他方、「総合的満足度」（問14）、「学生意欲」（問2）については、学生・教員の見方は逆転し、教員が学生の総合的満足度、意欲的取り組みを低く見積もる傾向がある。ちなみに同様の傾向は、他の科目群の場合にも見られることが報告されている。

②「目的テーマ等の設定」



まず、「シラバス」（問11）、「テーマ関心」（問12）について、教員と学生の認識に隔たりが大きいことが目を引く。とくに「シラバス」は、教員が思う以上に大きな不満を与えており、それだけに対策がいっそう求められよう（自由記述には、詳細さ・明確さを求める声のほか、「実際の授業内容と異なる」という指摘がかなりあった)。他方、「難易度」（問6）は、概して評価が高く、教員・学生の認識の差もさほど大きくない。

③「コミュニケーション」



「教科書・黒板等の使用」（問5）、「話し方」（問7）については、数値の上ではまずまずの評価で、教員との認識の差も大きくないが、自由記述をみると、この点に関する学生の関心は群を抜いて高く、改善を訴える声が非常に多かった。次に「学生参加」（問8）についてだが、先述のように学生の評価が著しく低い上に、教員による評価がそれをさらに下回るという驚くべき結果が出ている。このことは、そのさらなる実態把握と原因究明を要する深刻な事態と言えよう。そこで節を改め、次にこの問題を自由記述を中心にやや詳しく見ることにしたい。

4. 学生参加について

学生1293件、教員79件の自由記述は、関係者の尽力によりエクセルの表に入力され、各件ごとに内容上の分類を示すカテゴリー番号等が付された見やすい形に整理されている。今回、その番号をもとに「学生参加」に関する記述を抽出してみたところ、おおむね次のような内容を含むことが判明した。それらを内容別に分類し、主な意見を紹介する（○は肯定的意見、△は否定的意見。表現は多少変更を加えたところがある）。

・学生

「一般的な参加要求」

△ 一方的に話し、聞くだけの授業はつまらない。

△ 学生が授業に参加できる時間をふやしてほしい。

△ 授業で受けた刺激を自分の言葉に変換する時間がもっとあるといい。

○ 学生参加型の授業は面白かった。先生が興味を促してくれていてよかったと思う。

○ 生徒に授業の参加をちゃんと促してくれた。

○ 一方通行の授業でないので意欲的に取り組めた。

「議論・グループ討論」

△ グループ討論や議論に、もっと時間を使いたい。

△ 話しが高度で、自由な議論ができない。

○ 生徒どうしの討論がよかった。

○ 他の学生の方との討論も自分の視野を広げる意味で役立った。

○ 大人数なのにグループでの話し合いを持てるところがよかった。

「レポート・課題」

△ 書いて提出する形も併用するともっと良いと思う。

○ 毎回授業後の小レポートは良かった。

○ 毎回レポート課題が出ること。復習ができるから。

○ 授業毎のアンケートとその集計結果の提示。

○ 授業中のレポート提出。

「グループ制・分担制・発表」

○ グループワーク。

○ 2人1組で参加できる点。

○ 分担制にしたことで授業の内容が広がった点が良かったので他でも導入して欲しい。

○ 生徒が発表するということが面白かった。

○ 学生が発表し、学生が質問しあうという授業形式を活かせていた点。

○ 生徒から発表をしてもらったりという工夫がとても良かった。

「質問・意見」

△ 質問の受け付け、それを皆の前で公表して欲しい

△ 漠然と「質問ありますか」と問われても質問できない。もっと細かく機会を与えてほしい。

△ 陳腐、無関係な質問が多いので教員側で改めるように言って欲しい。

△ 質問者の質問があいまいだった。

○ 積極的に生徒に質問し､意見を授業に取り入れていた点。

○ 質問がしやすい環境だったのでよかった。

○ 質問を授業中に促して下さって良かった。

・教員

△ 受講者が多すぎるため学生と対話形式の授業は不可能。

△ 学生の授業参加を促すには、人数および背景（知識など）が異なりすぎて困難。もう少し受講者のバックグランドをそろえて欲しい。

△ 学生の理解を、質問を通して把握しようと努力したが、結局よくつかめなかった。

△ 授業参加を促し続けても「のれんに腕押し」で、無力感が大きい。

○ 毎回、設問を出して（10分程度）記述することを求めている。学生の記述にコメント等を記して、次の時間に返している。

教員については、受講者数が多いため学生参加の授業が十分実現できないという意見が比較的多い一方、諦めにも似た声があるなどその反応は様々だが、その困難性への意識は概ね共通しており、それがまた、低いTEのアンケート数値にも反映しているようである。他方、学生の側では、ご覧のように、グループ討論、発表、レポート、質問促進などの実践を求める声が多く見られ、学生参加型授業への期待は高い。確かに、都市教養プログラムの授業規模などを考慮すると、それが一般に困難であることは否定しがたく、また私自身の授業経験からしても日々その難しさを痛感するところであるが、たとえば「学生参加」で高い評価を得た担当者を講師に招き、具体的な実践成功例から学ぶ機会を設けるなど、期待に応える努力と具体的対策が急務であろう。